村の暮らしそのものを観光資源に ベトナムで実践した手法で地域貢献

安藤 勝洋さん　山梨県立大学 国際政策学部 国際コミュニケーション学科 講師
Katsuhiro Ando

協力隊時代から一貫してベトナムにかかわり、ヘリテージツーリズムによる観光開発を先導した。今は地元の山梨県で大学教員として、ベトナムとの交流も続けながら、学生と共に過疎地の活性化に取り組んでいる。

大学院で開けた ベトナムへの道

「行った瞬間からベトナムが好きになりました。特にホイアンには、昔からいたような感じがあって。ベトナムの人にも、言わなくてもわかってくれる日本人と同じ感覚を持っている人がいます」

安藤さんが初めてベトナムへ行ったのは2000年、まだ青年海外協力隊に参加する前、大学院で学んでいる時だ。ホイアンで住人と町を歩き、まちづくりのルールを考えるワークショップを実施した。

「大学3年の時にインドを旅行して、強烈なインパクトを受けました。大学では建築デザインを勉強していましたが、全く興味が持てなくなった。普通の就職も考えられなくて、国際協力の道に進みたいと思ったけれど、英語もあまりできない自分の力不足を痛感しました」

もう少し勉強し力をつけてから海外に出ようと、大学院進学を決めた。ホイアンを世界遺産にするための調査をしていた教授の下で学び、ベトナムとかかわり、修士課程修了後の2003年、自然な流れのように協力隊でベトナムへ行くことになった。

ホイアンはベトナム中部にある、国際交易で栄えた港町だ。商人が多く住み、かつては日本人町もあった。木造二階建ての家が軒を連ねる古い街並は、安藤さんが赴任する3年ほど前に世界遺産になった。だが、ベトナム戦争が終わった1975年以来あまり手入れがされておらず、かなり傷んだ状態の建物も多かった。

古い家の修復から 観光に目を向けて

安藤さんの任務は、そういう建物を地元の職人と一緒に修復することだ。ただ修復するだけでなく、町のよさを残しながら、観光客向けに活用するまちづ

学生たちを連れ、ベトナムのヌア村を訪問。村の観光資源を体感しながら、「ヘリテージツーリズム」を学ぶ。

ゼミのフィールドワークで訪れた芦川町にて、学生たちと活性化プロジェクトに取り組み中。

豊富な知識と経験に裏付けされた講義の後で、学生たちをフィールドに送り出す。

くりを住民と話し合いながら行った。

子どもたちに町の歴史を伝え、将来像を描いてもらう企画を実施。ベトナムと日本の友好を伝統的な歌や踊りなどで祝うお祭りも始めた。この日越ホイアン・フェスティバルは今も続いている。

「協力隊の任期を終えて、何かができたという達成感がありました。JICAの職員や専門家と出会い、国際協力という世界に少し近づけた。こういうキャリアがあるんだ、自分にもできるんじゃないかなと、続けてみたいと思ったのです」

2005年に帰国した後は、JICAのジュニア専門員としてベトナム事務所で地域開発を担当。それからもJICAの専門家や調査員としてベトナムに赴き、観光開発を中心に手がけるようになる。

山梨の町や村でも ヘリテージツーリズムを

安藤さんは、村の人たちが守ってきた暮らしを観光資源にする「ヘリテージツーリズム」の手法を採り入れた。これをもとに、ベトナム語版と日本語版で作成した「ベトナム農村観光開発実践的ガイドブック」は行政に評価され、観光開発の指針にもなっている。

2016年からは安藤さんが中心になり、JICA草の根技術協力「ヘリテージツーリズムによる辺境農漁村の生計多様化プロジェクト」がスタートした。その拠点のひとつヌア村は、山間部にあるタイ族の村だ。観光客は高床式住居にホームステイし、農村の伝統的な暮らしを体験する。

「住んでいる人が生み出したものの価値を認識し、見せ方を考え、インフラを整備するのが私たちの仕事です。村人は暮らしに誇りを持ち、繋がりもできて、元気になりました。自給自足が基本ですが、確実に現金収入も増えています」

プロジェクトが始動するまでの間に、研究者の道も視野に入れ、大学院に戻って博士号を取得した。そして2017年から、山梨県立大学の国際政策学部国際コミュニケーション学科の講師に。

山梨県には過疎化が進んでいる地域がたくさんある。安藤さんはベトナムでの観光開発のノウハウを活かし、学生や地元の人を巻き込んで、その活性化プロジェクトに取り組んでいる最中だ。

安藤 勝洋さん プロフィール

山梨県出身。大学で建築を学ぶ。2003年から協力隊でベトナムへ。2005年の帰国後もJICAのジュニア専門員や観光開発専門家等でベトナムにかかわり、通算10年以上ベトナムに在住。工学博士。2017年から山梨県立大学国際政策学部国際コミュニケーション学科講師。

「学生たちをヌア村にも連れて行きました。村の人の話を聞き、自分の村を愛する熱い思いに触れ……。村の人は学生を自分の子どもみたいに扱ってくれるので、別れる時には泣いて抱き合っていました。ヌア村の人たちも私たちが活動している芦川町を訪れ、ほうとう作りを体験したりしたんですよ」

安藤さんがベトナムで得たものが、日本に山梨県に反映されて、地域を元気づける。国際協力とは、先進国が発展途上国を援助する一方的なものではなく、双方向に循環するものなのだということを、安藤さんは体現している。

学生がゼミを選ぶ際に、安藤ゼミは人気だという。安藤さんの存在そのものに学生たちは触発され、次の時代の国際協力を担う人が育っていくのだろう。

安藤さんへのエール！

国際政策学部
国際コミュニケーション学科
教授
吉田 均さん

一日でも長くこの大学、この地域でのご活動を請う！

自分のやってきたことを、誇張も卑下もせず淡々と話す。飾らない人柄で、学生に絶大な人気があります。安藤先生は、学生に自分もああなれたらいいなと思わせる教員なんです。幸せとは何か、社会の発展とは何かを考え、新しい地域や社会の形を提案する力がある人です。一生この大学にいろとは言いませんが、一日でも長くいてほしいと願っています。